

第4章 総括

検出遺構について 今回の調査では、南北に細長い調査区中でX-159,036mを境に堆積環境が異なる。南側は弥生時代後期以前に離水し標高26.3m前後の微高地となり、弥生時代後期後半～庄内式期に居住域として利用される。北側は反対に土地が低く、より遅い時期まで湿地状の凹地である。遅くとも中世に耕地化され(2層)、近世には東西に細長いS006ため池(図13)が築造されている。

この凹地は、南端から北東約50mの地点で弥生時代中期の柱穴や弥生時代後期の土坑S0928を標高26.2m前後で確認できるため、弥生時代中期の幅はこれより狭いと考えられる。この大きい凹地内の南端で検出されたS005凹地には、微高地上から破棄された弥生時代後期～庄内式期Ⅱの土器が出土している(図14～16)。その下層には北西方向に流れていたS012流路(第4層)があり、堆積した植物遺体層の放射性炭素年代(1890±20BP)から庄内式古段階以前に放棄流路となったことがわかる。この流路は低位段丘構成層(第7層)を浸食しているため、調査区北側にある縄文時代以前の谷状地形を流路が南に側方移動しながら堆積物を上方に付加していったと考える。なお、流路の南側方への氾濫は認められず、流路が放棄される直前の水位は標高26m以下で流路幅も10m未満であったと推測される。

これら凹地と微高地上の遺構が確認されたことで、新堂遺跡内の微高地上に点在した集落の新たな手がかりを得ることができた(図25)。

出土遺物について 調査ではコンテナ30箱の遺物が出土し、うち96点を実測した。遺物出土量が最も多かったのはS005凹地で、S008溝がそれに次ぐ。S008溝出土土器は弥生時代後期後半に帰属し、北側斜面下にあるS005凹地から出土した土器よりも古い様相を呈する。

S005凹地から出土した土器は、泥質堆積に破棄された後は攪乱を受けておらず、比較的良好な状態である。甕以外の器種にも被熱痕が認められ、椀形高坏(61)が平底鉢(40)を載せられたままの状況で出土しており、廃棄行為については今後検討が必要である。

これらの土器は、ほぼ伝統的V様式の土器様相で弥生時代後期後半～庄内式期Ⅱ(庄内式古段階)に帰属すると考えられる。上層から出土した弥生時代後期後半に帰属する個体は、S008溝をはじめとする南側の斜面上に位置する遺構群から流入した可能性がある。

器種ごとの特徴であるが、壺は広口壺と直口壺の両者が出土しており、生駒西麓産胎土の垂下口縁広口壺(16)

が1点含まれている。

甕は1点を除き、球形化が進んだ体部に突出した平底または突出しない小さい平底が付くタタキ甕である。例外の1点は生駒西麓産胎土の小型甕(33)で、倒卵形を呈する体部に尖り底に近い底部を持つ。成形のタタキ方向は左上りで、一部右上がりのタタキと交差する。庄内形甕と思われるが、体部外面に明瞭なハケ調整を観察することができない。

高杯は弥生時代後期後半～庄内式古段階の各時期に帰属する有稜高杯が出土している。また、庄内式古段階に帰属する外面に縦方向のミガキを施す有段高坏(57)と脚裾部が大きく広がる椀形高坏(59)が出土している。鉢は体部が球形で尖り底の有孔鉢(49)があり、小型品はバリエーションが豊富である。また、内外面に精緻な横方向のミガキを施し赤色顔料を塗布した精製鉢(47)は中河内出土するものに似る。

小型器台の可能性のある土器(71)は1点出土しているが、他に小型精製器種が出土しておらず、庄内系高坏も見当たらない。そのため、帰属時期は庄内式期Ⅰまで遡る可能性もある。今後、市域北側の遺跡や更に北側にある瓜破遺跡などの事例をふまえ、当地での土器様相を明らかにしていく必要がある。

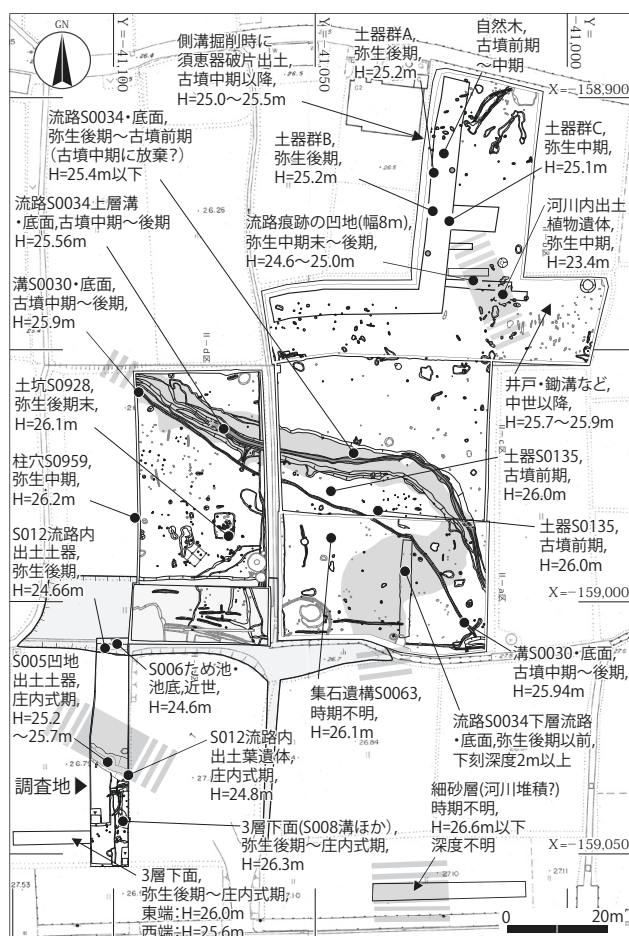


図25 弥生時代～古墳時代の主な遺構 (1:1500)